

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：82674

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25590165

研究課題名(和文)高齢者の若年世代への態度と支援に関する研究

研究課題名(英文)Older adults' attitudes and support toward younger generation

研究代表者

小林 江里香(KOBAYASHI, Erika)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・主任研究員

研究者番号：10311408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：先行研究の多くは、エイジズムなど高齢者に対する態度に焦点を当ててきたが、本研究は高齢者の若年世代への態度に着目し、彼らへの支援行動との関連を検討した。無作為抽出された首都圏の60-69歳を対象にした郵送調査(813人、回収率54%)データを用いて、若年者への否定的態度、地域の子育て支援行動尺度等を開発した上で、様々な態度と若年者支援との関連を調べた。その結果、「世代性」は若年者支援を促す最も強い効果、「(若年者への)嫌悪・回避」は支援を抑制する効果を示した。さらに、若年時に年長者から支援を受けた経験は、「世代性」を高め、「嫌悪・回避」を低めることで、若年者支援を促していた。

研究成果の概要(英文)：While previous studies have focused on attitudes toward older people such as ageism, this study focused on attitudes of older people toward younger generation and their associations with support giving for the young. We analyzed data of 813 persons aged 60-69 who were randomly selected in Tokyo Metropolitan area and responded to a mail survey (response rate: 54%). After developing scales such as "negative attitudes to the young" and "the community childrearing support scale," relationships between various attitudes and the supportive behaviors were examined. Among the attitudes, "generativity" or concern for the next generation showed the strongest positive effect on supportive behaviors, while "antipathy and avoidance (to the young)" showed a negative effect. Moreover, those who had experienced more support from seniors in their youth were more likely to have higher generativity and lower antipathy and avoidance, which promoted support for the young when they became 60's.

研究分野：老年社会学

キーワード：世代間関係 高齢者 子育て支援 援助行動 エイジズム ソーシャルサポート 高齢者就労

1. 研究開始当初の背景

わが国では、急速に進む少子高齢化や停滞を続ける経済状況を背景に、世代間の対立につながりかねない様々な問題が噴出してきている。例えば、社会保障の給付と負担においては、若年者ほど不利になる世代間格差が拡大していること、年金の受給開始年齢の引き上げに伴い、中高年者の雇用継続政策が進められている一方で、正規雇用の職に就けない若者が増加していることなどが挙げられる。

他世代への理解を促すための研究や取り組みは、これまでも行われてきた。例えば、高齢者に対する差別や偏見としての「エイジズム」や、児童の高齢者イメージを測定するための尺度の開発が国内外で進められ、エイジズムをもつ人の特徴の解明や、教育プログラムの効果の検証に用いられている¹⁾。

しかしながら、このような若年者の高齢者に対する態度に関する研究の蓄積に比べて、高齢者側からの若年者への態度についての研究は乏しい。そこで、本研究は高齢者の若年世代への態度に焦点を当て、これらの態度が、若年世代への支援的行動とどのように関連するのかに着目した。

2. 研究の目的

本研究は、1) 高齢者の若年世代に対する態度や支援行動の内容を明らかにし、2) それらを測定するための尺度を開発すること、3) 測定された態度と、若年世代への支援的行動との関連性を明らかにすることを目的とした。

なお、本研究での「高齢者」としては、主に60～70歳代前半までの前期高齢者を想定した。この年齢層は、就労を継続し、職場で若年者との交流が不可避な人も多いことや、地域・ボランティア活動の担い手としての期待が高いことによる。また、「若年者」「若年世代」には、高齢者からみて相対的に年齢が若い世代(次世代)全体を含めた。

世代間で連帯して社会的問題の解決にあたるには、若年者側だけでなく高齢者側からの協力も不可欠であり、本研究によって、高齢者側からの若年世代への理解と支援的行動の促進につながる研究成果が得られることが期待される。

3. 研究の方法

(1) 若年世代からの意見・経験の収集

高齢者の態度や支援を測定する尺度作成において、支援の受け手となる若年世代側の視点も反映させるため、次の2つの方法により、若年世代の意見や高齢者との交流経験の事例を収集した。

まず、20代の大学生117名に質問紙調査を行い(2013年10月)、高齢者が若者について理解していないと感じた経験についての自由記述を求め、質的分析を行った。

次に、20～50代の登録モニター300人を対象とするインターネット調査(2014年6月)

において、60代以上の人の言動で、うれしかったり喜んだりしたこと(ポジティブ経験:P経験)、不快に感じたり、悲しくなったりしたこと(ネガティブ経験:N経験)について、それぞれ2つまで挙げてもらい、その具体的な言動と相手との間柄について尋ねた。これにより、P経験337事例、N経験264事例を収集した。収集された事例の内容は、評定者2名がコード表(P経験:19カテゴリ、N経験:21カテゴリ)に基づき評定し、一致した分類コードを採用した。不一致の事例は、評定者とは別の研究者が最終コードを判断した。評定の一致度を示すカッパ係数は、P経験が0.76、N経験が0.72であった。

(2) 60代を対象とした郵送調査の実施

2014年11～12月に、住民基本台帳より無作為抽出された首都圏(1都3県)在住の60～69歳男女1500人を対象に郵送調査を実施し、813人(54.2%)より有効回答を得た。

調査票には、先行研究や上記で収集した事例を参考に作成した、世代間関係に関する意見や若年者への態度、支援等に関する質問項目が含まれていた。作成・使用した尺度の詳細は、次節4の(2)(3)で説明する。

4. 研究成果

(1) 若年世代からの事例収集による成果

インターネット調査で得られたP経験、N経験の事例について、相手との間柄で最も多かったのは「自身または配偶者の親」であった(P経験の25%、N経験の36%)。

表1はP経験、表2はN経験の分類を上位カテゴリ別に集計した結果である。相手との間柄のうち、親族以外は職場や仕事関係の人(職域)とそれ以外(地域)に分けた。表1より、P経験としては、どの関係についても評価的サポートの受領(特に「感謝を表す」)が多く、特に職域での事例で割合が高いこと、情緒的サポート(特に「心配・気遣い・ねぎらい」)は直接的な援助を提供してもらう手段的サポートよりも該当事例が多いことが示された。また、N経験としては「非難・文句・いやみ・怒り」が圧倒的に多かったが、親族については「ディスコミュニケーション/無理解」(特に「価値観の押しつけ」)、親族以外の関係では「模範とならない態度・行動」(職域では「無責任な態度・行動」、地域では「マナーの悪さ」が最多)も多くみられた。

本結果は、高齢者の若年世代への支援が受け手にとってポジティブな効果をもつには、知識の提供や直接的な援助だけでなく、評価的・情緒的サポートにも注目すべきであること、また、価値観の相違に配慮する必要があることを示唆している。

さらに、大学生調査で収集した若者への無理解を感じた経験や、インターネット調査のN経験の事例では、「高齢者は優先されて当然」という態度や、若者を見下すような態度への不快感についての報告もあった(大学生

6件、N経験9件)。高齢者を尊重すべきという「敬老意識」が若年者支援に与える影響についても検討が必要である。

表1 60代以上の言動のポジティブな経験

上位カテゴリ (かつこ内は下位カテゴリ数:カテゴリ例)	合計: 該当件数 (337事例 中の%)	相手との間柄別		
		親族 ^{a)} 件数 (148事 例中 の%)	職域 ^{b)} 件数(98 事例中 の%)	地域 ^{c)} 件数(91 事例中 の%)
評価的サポート(5:ほめる、感謝を表す、自分への期待・信頼を示す等)	171 (50.7)	60 (40.5)	64 (65.3)	47 (51.6)
情緒的サポート(5:心配・気遣い・ねぎらい、励まし、相談・助言、共感・理解を示す等)	69 (20.5)	39 (26.4)	16 (16.3)	14 (15.4)
手段的サポート(3:もの・費用・労力提供)	41 (12.2)	18 (12.2)	12 (12.2)	11 (12.1)
その他(5:自分への好意・関心がわかる行為等)	63 (18.7)	28 (18.9)	11 (11.2)	24 (26.4)
分類不能(詳細不明)	18(5.3)	11(7.4)	4(4.1)	3(3.3)

a)祖父母、自身または配偶者の親、その他の親族
b)同じ職場の人、仕事関係(仕事で接する客を含む)
c)友人・知人・近所の人、見知らぬ人・通りすがりの人、その他

表2 60代以上の言動のネガティブな経験

上位カテゴリ (かつこ内は下位カテゴリ数:カテゴリ例)	合計: 該当件数 (264事例 中の%)	相手との間柄別		
		親族 ^{a)} 件数 (121事 例中 の%)	職域 ^{b)} 件数(59 事例中 の%)	地域 ^{c)} 件数(84 事例中 の%)
ディスコミュニケーション/無理解(4:意思疎通ができない、価値観の押しつけ等)	46 (17.4)	26 (21.5)	10 (16.9)	10 (11.9)
非難・文句・怒り・いやみ(6:言葉による攻撃、してあげたことに文句・不満、悪口等)	113 (42.8)	51 (42.2)	23 (39.0)	39 (46.4)
模範とならない態度・行動(6:マナーの悪さ、無責任、自分勝手、横柄な態度、過度に頼る等)	72 (27.3)	19 (15.7)	20 (33.9)	33 (39.3)
その他(4:高齢による衰え、マイペース等)	23 (8.7)	18 (14.9)	4 (6.8)	1 (1.2)
分類不能	16(6.1)	9(7.4)	4(6.8)	3(3.6)

a)~c)は表1と同じ。

(2)若年世代への支援行動の測定尺度

①「地域の子育て支援行動尺度」の開発

母親の育児不安や孤立が問題となる中で、親だけでなく多様な人々が子育てに関わることの重要性が指摘されている。地域での若年世代への支援としては、親族でない子どもや親に対して行われる「地域の子育て支援行動」に着目し、測定尺度の開発を行った。

まず、先行研究と、インターネット調査で収集した事例のうち、子どもや子育てに関する事例(P経験:27事例、N経験:14事例)を検討した。その結果、地域の子育て支援行動は、子どもの安全を守り、健全な成長を促すことを目的とした支援(以下、「子どもの安全・健全な成長」)、親の身体的・経済的負担を軽減する「親への手段的サポート」、親の心理的負担を軽減し、子育て意欲を高める効果が期待される「親への情緒的サポート」

の3つに分けられた。情緒的サポートには、ほめるなどの評価的サポートも含む。

首都圏60代の調査では、これらの概念に基づき作成された表3の具体的な行動の頻度を、自分の子・孫に対する行動は除外するように注意を促した上で、この1年くらいの経験を振り返って回答してもらった。回答は「よくある」「ときどきある」「あまりない」「全くない」に、それぞれ3~0点を割り当てた。

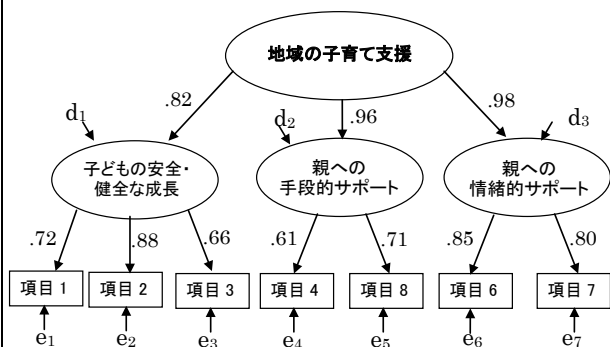
確認的因子分析において、上記3つの構成概念を下位の3因子とし、その上位に「地域の子育て支援」因子をおく、2次因子分析のモデルの適合度を検討した結果、項目5(登下校の見守り)を除外したモデルにおいて、高い適合度を得られ(図1)、尺度の構成概念妥当性が確認された。残りの7項目での信頼性係数も十分に高かった($\alpha=0.87$)。

7項目を合計した尺度得点を従属変数とする重回帰分析の結果、地域の子育て支援行動は、子ども・子育て世代との交流頻度の多寡により説明される部分が大きいものの、交流頻度を調整しても、女性、孫の世話をしている人、世代性(generativity;後述)²⁾が高い人ほど得点が高かった。

表3 「地域の子育て支援行動」の項目
(項目番号) 具体的なワーディング

- (1) 近所の子どもと道で出会うと、あなたのほうからあいさつしたり、声をかけたりする
- (2) 子どもが、良いおこないをしているのを見かけて、子どもや親をほめる
- (3) 子どもが、良くないおこないや危険なことをしているのを見かけて、注意する
- (4) 近所の子どもを預かったり、子どもの遊び相手になったりする
- (5) 子どもの登下校の安全を見守る【削除】
- (6) 子育て中の親の苦労をねぎらったり、がんばりをほめたりする
- (7) 子育ての悩みに耳を傾けたり、相談にのったりする
- (8) 子育て中の人や子ども連れの人に、手助けを申し出る(「手伝えることがあればお知らせください」と伝えるなど)

注) 項目5は最終的な尺度からは削除



$\chi^2=49.7, df=11, p<.001, GFI=.981, AGFI=.952, CFI=.983, RMSEA=.068$

図1 「地域の子育て支援行動」の確認的因子分析結果(標準化推定値とモデル適合度)

②職域における若年者支援の測定

職域での支援については、首都圏 60 代調査の回答者のうち、現在仕事に就いており、仕事上で 20～40 代くらいの人と会話する機会が「よくある」または「ときどきある」と回答した人 (311 人) のみに質問した。質問では、その人たちとの交流の中で、次のようなことをすることがどのくらいあるかを、「よくある」～「全くない」の 4 件法で尋ねた：a) 相手の仕事の苦勞をねぎらったり、がんばりをほめたりする、b) 仕事上の技能や知識を相手に伝えたり、教えたりする、c) 相手の悩み事に耳を傾けたり、相談にのったりする、d) 相手がしてくれたことに対して、感謝の気持ちを伝える。

探索的因子分析 (最尤法) の結果、第 1 因子の固有値 (寄与率) は 2.44 (61%) であることから、1 因子構造とみなされた。第 1 因子の因子負荷量は 4 項目とも 0.6 を超えおり (0.61～0.80)、クロンバックの信頼性係数は $\alpha = .79$ と十分な高さを示した。

(3) 若年世代や世代間関係に関する態度についての尺度の検討

①若年者への否定的態度

若年者への否定的態度についての尺度は、日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版³⁾ を参考にした。FSA は 3 つの下位因子で構成されるが、このうち、「嫌悪・差別」「回避」からはそれぞれ 2 項目ずつを選び、「高齢者」を「若い人」に入れ替えて使用した (表 4 の項目 7・8 と、項目 4・9)。「誹謗」の項目は、若い世代からの事例収集の中で若年者への偏見・ステレオタイプとして挙げられた内容を参考に作成した。

因子分析において、十分な因子負荷量が得られなかった 2 項目 (表 4 の項目 3、4) は最終的な分析からは除外した。残りの 7 項目は、図 2 の通り、「誹謗」と「嫌悪・回避」の 2 つの下位因子に分かれた。

表 4 「若年者への否定的態度」の項目 (項目番号) 具体的なワーディング

(1) 最近の若い人は、昔の若い人に比べて、努力や忍耐力が足りない
(2) 若い親には、子どものしつけがきちんとできない人が多い
(3) 若い人のふるまいには、感心させられることが多い (逆転項目) 【削除】
(4) できれば若い人といっしょに住みたくない【削除】
(5) 若い人は、不平が多い
(6) 若い人が就職できなかつたり、すぐに仕事を辞めたりするのは、本人に問題があるからだ
(7) 若い人と会うと、ときどき目を合わせないようにしてしまう
(8) 若い人が話しかけてきても、私は話をしたくない
(9) 個人的には、若い人とは長い時間を過ごしたくない

注) 「非常にそう思う」～「全くそう思わない」の 5 件法で評定。項目 3、4 は最終尺度からは削除

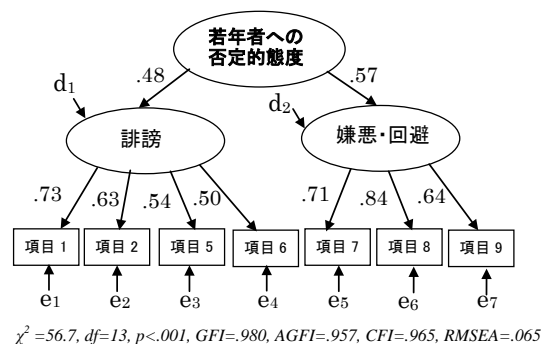


図 2 「若年者への否定的態度」の確認的因子分析結果 (標準化推定値とモデル適合度)

②世代間関係についての態度および態度間の相関

「世代性」は、次世代育成や世代を超えて継承されるものへの関心を反映したもので、Erikson の発達モデルでは中年期以降の心理社会的適応において重要とされる。世代性については、短縮版 Generativity 尺度²⁾を用いた。「私が死んでも、人は私のことを覚えていてくれるだろう」など 5 項目からなり、「非常に当てはまる」～「全く当てはまらない」の 5 件法での回答を合計した ($\alpha = .73$)。

「敬老意識」としては、「若い人が、高齢者を支えるのは当然だ」「若い人は、高齢者に対して、年を重ねたことに敬意を払うべきだ」「若い人は、高齢者の話をよく聴くべきだ」の 3 項目について、「非常にそう思う」～「全くそう思わない」の 5 件法で尋ねたものを合計した ($\alpha = .79$)。敬老意識の項目作成に当たっては、若年者用に開発された尺度⁴⁾⁵⁾の一部を参考にした。

また、「敬老意識」とともに質問した「高齢者は、若い人の世話にならないよう努めるべきだ」「高齢者は、自分ができることをして、若い人を助けるべきだ」は、探索的因子分析 (最尤法、プロマックス回転) の結果、「敬老意識」とは独立した因子であり、「高齢者自立意識」と名付けた ($\alpha = .53$)。

さらに、援助行動との関連が指摘されている互惠性の意識について、「人は、自分を助けてくれた人が困っているときには、多少の犠牲を払ってでも助けようとするものだ」「人を助けることは、長い目でみれば、自分のためにもなる」「たいていの人には、人から親切を受けると、自分も親切にふるまおうとする」の 3 項目を質問した ($\alpha = .78$)。

表 5 に、若年者への否定的態度を含む態度間の相関係数を示した。最も高い相関は、世代性と互惠性との間でみられた ($r = .36$)。敬老意識が高い人は、世代性も高いが (.27)、若年者への誹謗への賛同も高く (.22)、高齢者自立意識とは無相関であった。若年者への否定的態度の下位因子である「嫌悪・回避」と「誹謗」の相関は、有意ではあるが高くないため ($r = .24$)、支援行動との関連をみる以下の分析では個別に扱った。

表5 態度間のピアソンの相関係数

	B	C	D	E	F
A 世代	.36**	.27**	.14**	-.22**	.05
B 互恵	1	.26**	.24**	-.20**	.08*
C 敬老		1	.02	-.07	.22**
D 自立			1	-.15**	.03
E 嫌悪				1	.24**
F 誹謗					1

注) A: 世代性、B: 互恵性、C: 敬老意識、D: 高齢者自立意識、E: 嫌悪・回避、F: 誹謗
* p<.05 ** p<.01

(4) 態度と様々な若年者支援行動との関連

上記(3)の態度と、若年世代への様々な支援との相関係数を求めた。支援は、a) 地域の子育て支援(7項目の合計)、b) 職域での若年者支援(仕事で20~40代との交流がある人のみ、4項目の合計)のほか、c) 募金・寄付(過去1年の実施有無)、d) ボランティア活動の実施(過去1年の実施有無)、e) ボランティア活動参加意向について検討した。c~eは、支援の対象を子どもや青少年に限定した。

表6より、どの支援も世代性との相関が最大で、特に職域での支援との相関が高かった(r=.40)。「嫌悪・回避」は一貫して有意な負の相関(-.10~- .25)を示したが、「誹謗」は職域を除く支援とは無相関であり、若者への批判的態度は必ずしも支援の抑制にはつながっていなかった。「敬老意識」は一部の支援と有意な正の相関があり、高齢者を尊重する態度が若年者への支援を妨げるわけではないことが示された。

表6 態度と若年世代への支援との相関係数

態度	地域 子育て	職域 支援	募金・ 寄付	ボラン ティア 実施	ボラン ティア 意向
A 世代	.33**	.40**	.27**	.20**	.30**
B 互恵	.18**	.12*	.14**	.04	.14**
C 敬老	.13**	.11	.06	.07	.16**
D 自立	.12**	.15*	.13*	.12*	.05
E 嫌悪	-.25**	-.23**	-.15**	-.10**	-.17**
F 誹謗	-.04	-.16**	.01	-.04	-.03

注) A~Fは表5注参照。* p<.05 ** p<.01

(5) 若年時の被支援経験は高齢期の地域の子育て支援行動を促すか：世代性と異世代への態度を媒介要因とした検討

本研究では、地域での子育て支援に焦点を当て、高齢者による若い世代への支援行動の促進・抑制要因について検討した。

促進要因としては「世代性」を想定し、世代性は、若い時に上の世代から支援を受けることで、異世代に対する敬意や関心が高まり、それによって高められると考えた。他方、抑制要因としては、逆エイジズムとも言える若年者への否定的態度を想定した。これにより、①若年時の支援受領経験→②異世代への態度→③世代性→④子育て支援行動という、異世代への態度と世代性を媒介要因とするパ

ス解析のモデルを構築した。モデルでは、①→③・④、②→④の直接的パスも検討した。

①若年時の支援受領経験については、「あなたが20~40代くらいのとき、あなたの周りには、次のような年長者(年上の人)が、どのくらいいましたか。親族、先輩・上司、先生、近所の人など、どのような関係の人でもかまいません」として、「たくさんいた」「少しいた」「いなかった」から選択した。このうち、ポジティブな支援受領(P被支援)は、「あなたの悩み事に耳を傾けたり、相談ののってくれた人」「あなたの苦労をねぎらったり、がんばりをほめてくれた人」「自力ではどうにもならない困難な状況で、助けてくれた人」の3項目の合計点(0~6点)とし、ネガティブな支援受領(N被支援)は、「あなたのすることに、小言を言ったり文句をつけたりした人」の有無とした。

②異世代への態度については、年長者への態度として「敬老意識」、下の世代への態度として、若年者への「嫌悪・回避」「誹謗」を検討した。ただし、「誹謗」については、①支援受領経験、③世代性、④支援行動のいずれとも有意な関連が見られなかったため、最終モデルからは削除した。

図3が最終的なパス解析のモデルである。完全情報最尤推定法(FIML)により、欠損値のあるデータも分析に含めた。態度および支援行動は潜在変数として設定しており、モデルの適合度は基準を満たしていた(CFI=.958、RMSEA=.035)。最終モデルの結果から明らかになったのは以下の点である。

第1に、多くの年長者からポジティブな支援を受けていた人ほど、世代性が高かった。P被支援は、年長者への敬意(敬老意識)を高めることで世代性を高める間接効果(.048, p<.01)と、若者への嫌悪・回避傾向を低下させることで、世代性を高める間接効果(.037, p<.01)があるが、それらを媒介しない直接効果も大きかった(.282)。第2に、P被支援経験は、世代性を高めることで、地域の子育て支援行動を促すことが示された。P被支援から支援行動へは、弱い直接効果(.092)に加えて、比較的大きな間接効果(.166)があり、支援行動への総合効果(.258)は、世代性(.344)に次いで大きかった。N被支援は、支援行動を抑制する弱い直接効果(-.073)のみ有意であった。第3に、若者への嫌悪・回避は、世代性を介して(-.052)、または直接的に(-.120)子育て支援行動を抑制していた(総合効果:-.172)。第4に、敬老意識は若年世代への支援を抑制しておらず、むしろ、世代性を介して、間接的に支援行動を促していた(.090, p<.01)。

本結果は、若い世代への適切な支援は、支援を受けた側の次世代育成・世代継承への関心を高め、その人自身も次世代を助けるようになるという好循環を生み出す可能性を示唆している。また、年長者からの支援は、上の世代のもつ知識・経験への敬意を高めるだ

けでなく、下の世代との接触回避傾向も低減させており、年長者の支援的行動を観察することで、下の世代とのコミュニケーション方法を学習することが考えられる。

本モデルが、職場など異なる場面での若年者支援にも適用できるかについては、今後さらに検討が必要である。

<引用文献>

- 1) 原田謙. エイジズム研究の動向と課題. 老年社会科学, 33(1), 74-81, 2011.
- 2) 田渕恵, 中川威他. 高齢者における短縮版 Generativity 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 厚生学指標, 59, 1-7, 2012.
- 3) 原田謙, 杉澤秀博他. 日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成: 都市部の若年男性におけるエイジズムの測定. 老年社会科学, 26(3), 308-319, 2004.
- 4) 豊島彩, 佐藤眞一他. 大学生における高齢者に対する規範意識の性差について: 孝行行動尺度の主体の違いによる比較. 第6回日本応用老年学会, 2011. 11. 11.
- 5) 高橋知也. 「青年期前期における敬老志向性尺度」の開発とその検討. 日本世代間交流学会誌, 3(1), 3-10, 2013.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

- ① 小林江里香, 深谷太郎, 原田謙, 村山陽, 高橋知也, 藤原佳典. 中高年者を対象とした地域の子育て支援行動尺度の開発. 日本公衆衛生雑誌, 63(3), 101-112, 2016. 査読有 DOI: 10.11236/jph.63.3_101

[学会発表] (計4件)

- ① 小林江里香, 原田謙, 深谷太郎, 村山陽, 高橋知也, 藤原佳典. 年長者からの被支援経験は高齢期の子育て支援行動を促すか—Generativity と若者への否定的態度を媒介要因とした検討. 日本社会心理学会第57回大会, 関西学院大学(兵庫県西宮市), 2016. 9. 17-18.
- ② 原田謙, 小林江里香, 深谷太郎, 村山陽, 高橋知也, 藤原佳典. 高齢者の若年者に対する否定的態度に関連する要因—世代間関係における「もうひとつのエイジズム」の検討. 日本老年社会学会第58回大会, 松山大学(愛媛県松山市), 2016. 6. 11-12.

- ③ 小林江里香, 深谷太郎, 村山陽, 高橋知也, 藤原佳典. 中高年者を対象とした「地域の子育て支援行動尺度」の作成と支援行動の関連要因. 第74回日本公衆衛生学会総会, 長崎ブリックホール(長崎県長崎市), 2015. 11. 4-6.

- ④ 小林江里香, 深谷太郎, 原田謙, 村山陽, 高橋知也, 藤原佳典. 世代間関係に関する態度と職域・地域における若年世代への支援—首都圏60代シニアの調査から. 日本老年社会学会第57回大会, パシフィコ横浜(神奈川県横浜市), 2015. 6. 12-14.

[その他]

東京都健康長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム「世代間関係の意識と実態に関する調査報告書—首都圏60代シニアの調査から—」, 2015年6月

(<http://www2.tmg.or.jp/spch/data/>「世代間関係の意識と実態に関する調査」パンフレット.pdf)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 江里香 (KOBAYASHI, Erika)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・主任研究員

研究者番号: 10311408

(2) 連携研究者

深谷 太郎 (FUKAYA, Taro)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究助手

研究者番号: 80312289

原田 謙 (HARADA, Ken)

実践女子大学人間社会学部・准教授

研究者番号: 40405999

(3) 研究協力者

村山 陽 (MURAYAMA, Yoh)

高橋 知也 (TAKAHASHI, Tomoya)

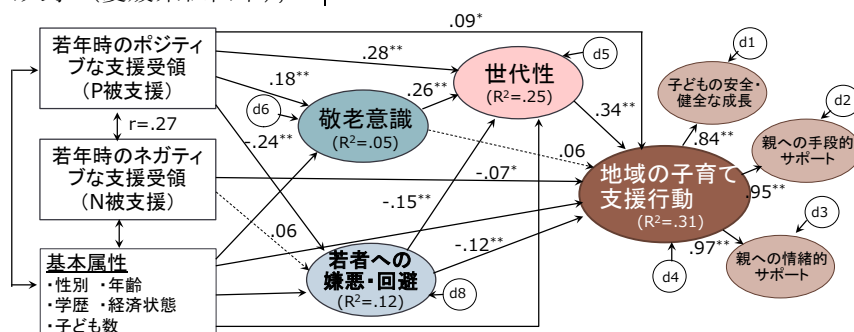


図3 地域の子育て支援行動の促進・抑制要因 (最終モデル)

注) 数値は標準化係数。 * p<.05 ** p<.01

$\chi^2=439.3, df=223, p<.001; CFI=.958, RMSEA=.035, AIC=641.3$